

「んー。いい天気じゃねエの」

天高く馬肥ゆとはよく言ったものだ、と一人悠々と伸びをして空を見上げる。風は爽やかになり、未だ残暑の名残はあるものの、大分湿度の低い状態になり、青く澄み渡った空はここ二週間程でぐんと高くなったのではないだろうか。

ふわふわとその青の中を自由に泳ぐ白い雲は長閑に流れて……。  
ごろん、と日差しに温められた屋上のコンクリートに寝転がる。

グランドから聞こえる賑やかな声は、まるで自分には関係ないような程遠く聞こえて。  
こないだいい天気で昼寝日和に、全く何て元気な奴らだ、と人事のように思つて目を瞑れば、  
燦々と輝く太陽からの陽光が臉を透かし、暗いのに眩しくて。

目を瞑つた事で更に周辺の音を遠くに感じる。  
そのまま自堕落に任せて、ふあああ、と盛大に欠伸をすれば、緩やかに睡魔が這い寄つてきて、  
臉の裏側に透かされる眩しさも遠ざかるようで。

「あ、また。こんなところに」

臉から溢れる光がさつと翳つたかと思うと、聞き慣れた声がして、政宗は煩エなと言うように  
にごろりと背を向けた。

「政宗殿、起きて下され。サボってばかりでは、叱られますぞ」

「煩エなア。こんな歳になつてまで球技大会なんてやつてられつかよ」

ゆさゆさと肩を揺すられて、渋々と言うように閉じたばかりの臉を上げて、むくりと起き上がれば、影を落とした張本人がジャージ姿に鉢巻まで巻いて、ちよこんとしゃがみ込んでいた。「アンタは、こういうの好きだろうけどよ？」

「なア、真田幸村？」

悄気た子犬のように所在無さげにちよこんとしゃがみ込んでいる男の赤茶けた癖毛をくしやりと掻き混ぜて、政宗が一つ目を撓ませれば、きゅ、と嬉しそうに髪色に良く似た、それよりも更に濃い色の茶色い大きな双眸を細めたのは政宗を呼びに来た幸村だった。

政宗にくしゃくしゃと撫でられ、気持ち良さげに目を細めていた幸村だったが、あ、と何かに気付いたように声を上げ、政宗殿、と普段から些か人より大きな声を更に大きめにして、自分を飼い犬のようにほさほさと撫でている政宗の面白そうに撓んでいる一つ目を覗き込んだ。「Oh、何だよ急に。デケエ声出すなつていつも言ってるだろ」

慣れたつもりでも、それでも間近に聞く幸村の大声はかなりのもので、政宗はShit! と小さく零す。

「申し訳ござらん」

政宗に窘められて些かしよぼんとした様子で幸村が頭を下げれば、まあいいつて。いつもの事だしな、と政宗の形良い唇から八重歯が覗く。その悪戯っぽい微笑みにどきんと幸村の心臓は跳ね上がるが、今はそれどころではないと、あのですな、と政宗の一つ目に視線を合わせた。

「な、に、言つてやがる」

はふはふと息苦しうにしながら頬を染め上げて、首筋までも薄ら赤くしているくせに未だに氣丈に憎まれ口を叩く政宗に、幸村はまことの事ゆえ、と笑いかけながら、這わせた手のひらを政宗の薄く割れた腹に這わせ、括れた腰まで撫でて、臍の窪みも一つ人差し指でくると可愛がると、もう一度上下する胸へと戻らせた。

撫でれば、可愛らしく主張してつんと引つかかる胸の頂に、こんなににして、と氣を良くして指で抓み上げれば、や、あ、と政宗の甘怠い聲が上がる。

ここも最初に触れた時は酷い扱いを受けて、散々だったのだけれど、この白い肌に寧ろ見て触つてと言いたげにぶつんと熟れた赤い実が生っているのを見れば、どうしても氣になって仕方がないし、触りたくて堪らなくて。

何度も何度も政宗に暴れられて罵られて、それでも諦めきれずにこの往生際の悪い性格を十分發揮して、暴れるじゃじゃ馬を宥めてすかして、何度も愛して。

そうして今ではすっかりこんな風に少し触れるだけでつんと尖って、敏感な肌を更に感情豊かにさせて政宗に甘い声を上げさせる場所になったのだ。

「随分と、可愛らしい」

政宗の肌臍た白い胸に主張する赤い果実を、見たままに言えば、うるせ、とか細く聞こえて笑いが込み上げる。

本当に、あなた自身こそが一番可愛くて堪らない、と。

そんな風に思いながら幸村は政宗の至るところに口付けて、舌を這わせ、舐めて、吸い付い

て白磁の肌に朱色の装飾を施していく。

この美しい人は俺のものだと主張する所有の証を仰け反る首筋から、忙しなく上下する薄い胸へ、赤い実を徒に甘噛みしては色付いた喘ぐ吐息を耳に心地よく受け止めて、いくつもいくつも残しながら、なだらかに繋がる割れた腹の上にも唇を落とし、臍の窪みにも舌を這わせ、制服を押し上げる愛しい熱源へと辿り着く。

苦しげに制服のズボンを押し上げて見れば、嬉しさに幸村の大きな瞳が細まる。

あ、あ、と艶っぽく途切れ途切れに喘ぐ政宗に気を良くして、幸村はガチャガチャと不器用ながらに政宗のベルトを外し、窮屈そうなファスナーを下ろせば、や、あ、と恥ずかしげに膝を寄せる姿が、恥じらっているのに逆に婀娜っぽくて。

それでは愛せませぬ、と幸村が柔らかく諫めれば、恨みがましそうな潤んだ政宗の一つ目が見上げてきた。

「そんなに可愛らしい顔をされて。——誘っておられるのか」

頬を染めて、潤む瞳には睫毛にびっしりと水の珠が張り付いて、酷く扇情的で、益々幸村の猛っている雄に熱が溜まる。

そっと寄せられた政宗の膝を割り開いてするするとズボンと下着を一緒に脱がせれば、目にも鮮やかな悩ましげな肢体が露になって。

十分に育つて天を仰ぐ政宗の花芯に、再び幸村の喉仏が派手に上下した。  
きゅ、と蜜を零して濡れて光る政宗自身を握り込めば。

あ、あ、あ、つやア……！